

別紙 4

| | | |
|----------|--------|---|
| 報告番 - | ※ - | 第 |
|----------|--------|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目
氏 名

乳児との“かかわり”における母親の主観性
—子どもの発達との関連に着目して—

上嶋 菜摘

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、母子相互作用の母親の側に焦点をあてて、乳幼児期の子どもへのかかわりを母親の主観性の観点から検討することを目的として行われた。

第Ⅰ章では、乳児期の子どもと母親の母子相互作用研究の流れについて概観した。特に、母子相互作用において子どもへのかかわりに影響を与えているとされてきた、母親による子どもの心的状態の把握および、母親の主観性に関する研究について整理を行った。

そして、第Ⅱ章では、母親が乳児期の子どものかかわりに着目できる手がかりについて、実験的手法を用いて多角的な視点から検討を行った。まず初めに、母親へ提示する刺激として用いるビデオクリップを作成した。続いて、作成した刺激を複数の母親に提示して、乳児に対するかかわりとその手がかりを回答させる半構造化面接を行った。半構造化面接によって得られた面接記録を質的に分析した結果から、乳児の心的状態や乳児の行動といった乳児に関する内容に加えて、母親自身の主観性に関する内容が抽出された。さらに、母親の主観性に関する回答をKJ法によってボトムアップにカテゴリー化を行ったところ、母親の主観性がどのような質的要素から構成されるのかという問いについて、母親が感じ取った乳児の状態と関係が深い内容と、目の前の乳児の状態にかかわらず母親自身の感情や主体性が強く表れていた内容まで様々であることが示された。具体的には、「乳児の心的状態への働きかけ」「母親自身の感情」「乳児への期待」「母親希求」「共有・共感」の5つの枠組みが示された。

これまでの研究では、研究者や関与観察者の立場からその存在や母子相互作用への関与が指摘されるにとどまり (Stern, 1985; 青木ら, 1999;

鯨岡,1989 ; 1999), 母親の認識という観点からの実証的研究は行われてこなかった。本研究の結果からは、これまで関与観察者による把握や記述によって示されてきた母親の主観性(鯨岡, 1986 ; 鯨岡ら, 1989)を、母親の言語報告によって実証的に裏づけるものであったといえよう。そして、母親が子どもの表出行動に気づき、心的状態を感じ取るという側面と乳児へのかかわりという行動の側面との間には、母親の主観性が介在していることが実証的に示され、母親が、客観的に観察可能な乳児の行動や乳児から感じ取った心的状態を基に応じているのみではなく、母親自身が自らの主観性を関与させながら主体的にかかわっている存在であることが示された。

続いて、第Ⅲ章では母親の認識という観点から、子どもへのかかわりの中で母親に喚起される主観性および乳児の心的状態を把握する方法について検討を行った。まず、研究協力者に対して自子と見知らぬ乳児の両方の映像を提示して、第Ⅱ章と同様の半構造化面接を行った。その結果、子どもへのかかわりの中で母親が自身のかかわりと関係づけて捉えることができていた要因は、共通の映像に対する回答にも反映されることが確認された。よって、実験的手法を用いて母親の主観性および乳児の心的状態を捉えることができていると考えられた。

第Ⅳ章では、第Ⅲ章で妥当性が確認された実験的手法を用いて、母親の主観性と子どもの発達との関連について検討を行った。具体的には、母親に対して三ヶ月時と九ヶ月児という異なる月齢の乳児の映像を提示し、半構造化面接を行った。面接で得られた回答を第Ⅱ章で示された母親の主観性の枠組みにそって検討した結果、母親に喚起されやすい主観性の特徴が、乳児の月齢によって異なることが示された。つまり、3ヶ月児に対しては、母親は、子どもの行動に着目しやすく、母親自身の感情状態や母親希求に関する内容が喚起されやすいのが特徴であった。そして、9ヶ月児に対しては、母親が子どもの心的状態に着目しやすく、母親が感じ取った子どもの心的状態に対する働きかけを意図した内容や子どもの成長に対する期待を含む内容が喚起されるようになっていたのが特徴であった。

また第Ⅴ章においても、母子合同面接の事例を通して母親の主観性が子どもへのかかわりおよび子どもの状態の把握とどのように関連しているのかについて検討を行った。事例は、子どもの行動の背景に意図や感情を把握することが困難になりやすい(小林・鯨岡, 2005)といわれる広汎性発達障害と診断され、母親が子ども感情理解や感情コントロールに問題を感じていた事例であった。本事例の検討からも、母親の主観性

が、子どもの行動および心的状態の把握や子どもへのかかわりと関連しながら変化しうるものであることが示された。

いずれの結果からも、母親が子どものどのような側面に目を向けやすいのかということが、母親の主観性のありように関連していることが示された。その特徴として、母親が子どもの行動に着目しやすい場合には、母親自身の感情状態や母親希求が喚起されやすいこと、そして、母親が子どもの心的状態に着目しやすくなると、子どもの心的状態への働きかけおよび成長への期待が喚起されやすいということが示唆された。

さらに、第V章の事例検討からは、母親が子どもの心的状態に目を向けられるようになっていくという変化のきっかけとして、子どもから求められているという母親希求を感じられることが重要であることが示唆された。

以上からは、母親の主観性の変化は、相互作用のもう一方の担い手である子どもの発達と関係していると考えられた。特に、子どもが自己の心的状態を表現および他者と共有できるようになり、相手の感情に気づくことができるようになるという第二次間主観性の獲得がその変化のきっかけになりうるのではないかと考えられた。

第II章から第V章までの結果を踏まえて、第VI章では、本研究で得られた知見および臨床的示唆について考察を行った。第IV章および第V章で示された、母親の主観性の変化と子どもの発達との関連からは、子どもの側の心的状態が未分化でありまいな時期や母親が子どもの心的状態を把握することが難しい場合には、乳児から喚起された母親自身の感情や母親が乳児に対してしてあげたいと思っている願望に寄り添うこと、また、母親が乳児から求められていると感じられるような子どもの行動に目をむけられるよう援助することが、子どもへのかかわりを支える上で大切であると考えられた。そして、子どもの側に他者に自身の心的状態を伝えたり、他者の心的状態に関する認識が芽生えたりして、母親が乳児の心的状態に着目しやすくなってきた時期においては、母親が乳児の心的状態をどのようなものとして感じ取り、それに対してどのような意図や思いを関与させてかかわっているのか、今後の子どもの成長発達に対してどのような期待を抱いているのか、ということに注意を向けることが、子どもへのかかわりを支える上で重要になると考えられた。

また、子どもから求められているという「母親希求」の感覚が回答されるようになった時期を経て、母親が子どもの心的状態に目を向けやすくなっていたことも第IV章および第V章に共通した特徴であった。この

ことから、「母親希求」の感覚をもてるということが、母親が子どもの心的状態へ目を向けていくきっかけとなりうる可能性があると考えられた。このことから、乳幼児期の子どもに関する支援者は、母親が子どもの心的状態を十分に感じとることが難しい段階において、乳児の情動表出が母親へ向けられたものであると感じられるように支援することが重要であると考えられた。

最後に、第V章の事例が、広汎性発達障害と診断され、感情面でのコミュニケーションに難しさがある子どもとその母親の事例であった。このことを踏まえると、子どもの側に相手の感情への気づきや自己の心的状態を伝える難しさがあったとしても、母親の主観性という観点から子どもへのかかわりへの介入可能性が考えられた。

以上のように、本研究から得られた知見は、乳幼児期の母子臨床において、母親の側の主観性の観点から母子相互作用へ介入する可能性を含んでおり、応用可能性を十分に有していると考えられた。